|  |
| --- |
| 日本比較文化学会・中部支部ニュース |

**第3号**　2013年6月5日発行

**2012（平成24）年度中部支部総会報告**　（中部支部長：岡本武昭）

2012（平成24）年度の中部支部総会は、年度末にネット上での開催となりました。以下、簡単に議事を報告します。

○報告事項

1. 新入会員について（1名）
2. 会員移動（2013年2月末現在、移動なし）
3. 第1回支部役員会開催（2012年4月24日：於クリエート浜松（5F52会議室）18:00～20:00）
4. インターネット上での臨時支部役員会・支部総会を開催し（5月）、安藤雅之氏（常葉学園大学大学院教授）の副支部長就任を協議し、承認を得る
5. 第3回研究会開催（2012年9月22日（土）14:00～17:00，会場：静岡労政会館）※詳細は後述
6. 第2回支部役員会開催（2013年2月10日（日），会場：浜松・楽器博物館セミナー室）2013年度活動計画、研究会日程、2012年度中部支部総会（3月中にインターネット上で実施）、次年度役員、この他にこれから役員会での検討課題としてメーリングリストの作成、論文集の発行、支部会員増の方策・中部支部の特色、他支部と同等になるための工程表の作成等々、協議を実施
7. 2013（平成25）年6月8日（土）開催予定の日本比較文化学会全国大会（於・同志社大学）において、パネリストとして中部支部から川口雅也氏（浜松学院大学）が参加を申し出て、役員会で了承される
8. その他：支部ニュースレター（3号）発行について

○協議事項

1. 2013（平成25）年度・日本比較文化学会中部支部活動計画について

・役員会（予定）：第一回・4月，第二回・9月

・研究会日程（予定）：第一回9月，第二回2月

1. 2013（平成25）年度中部支部役員について

支部長：岡本武昭

副支部長：澤田隆人，安藤雅之，川口雅也

支部幹事：津村公博

監事：白鳥絢也（支部ニュースレター補助）

事務局長・会計：渡部いづみ

中部支部ニューレター：加瀬谷恵

中部支部活動助言：太田敬雄（日本比較文化学会名誉会長）

1. 今後、役員会を中心に協議していく案件として

・会員相互の連携のためのメーリングリストの作成

・学会誌『比較文化研究』の発行

→　中部支部も担当編集に加わり、学会全体で年6回発行となるよう働きかける

・中部支部会員を増やす方策

　　・中部支部の特色づくり

　　・他の支部と同等になるための工程表

1. その他

**2012（平成24）年度中部支部第3回研究発表会報告**

　2012年9月22日（土）、静岡労政会館において第3回研究発表会（例会）が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。

**【テーマ：多文化共生と比較文化学】**

***多文化共生のための教養教育と「ものづくり」－歴史的視座から－***

***長谷川　詩織（愛知教育大学）***

「ものづくり」は、日本の製造業とその生産プロセスを思い出させる用語である。だが最近は、その用語の射程は拡張されており、それが持つ意味を改めて定義する必要性が指摘されている。若年層の職業意識を高めるために、ものづくり教育の有効性が見直されたり、豊かな感性を醸成するために、小学校教育の主要な軸として注目されたりしている。今日の日本では、物質的な豊かさにより生活が便利になる一方、機械に対する依存が高まるなど、実際にものをつくる機会が減少している。さらには、公共の遊び場の減少、犯罪の増加、ゲームやインターネットの浸透は、子供が遊ぶ場を屋外から室内に移行させ、自然との関わりの希薄化をもたらした。

　発表者は、上記の問題意識のもと、生活環境が変化するなか、ものをつくる行為がどのように問い直されたのか、20世紀転換期の合衆国に流通していた言説の分析を通じて考察した。まず、ものとのつながりが希薄化することで、人間はどのような感覚の変化に直面したのか、フランク・ノリスの小説『マクティーグ』を中心に論じた。ノリスの小説は、生産の機械化が進んだことで、ものと人間の関わりが希薄になり、その結果として能動性が減少したことを、流れに身を任せる労働者の無気力な姿を介して浮かび上がらせる。そして、生産から消費に至るまでの流れを俯瞰することで、全体における自己の立ち位置を理解し、負の連鎖に巻き込まれることを回避できると、登場人物が全体像を認識する結論から示唆した。

　続いて、ものをつくる行為を扱う言説を、ノリスの小説と比較しながら検討した。草創期の政治家ベンジャミン・フランクリンの『自伝』は、ものをつくる行為が合衆国の立身出世物語をどのように支えたのかを明らかにする。黒人教育者ブッカー・Ｔ・ワシントンは『奴隷より身を立ちて』のなかで、人種主義が激化する合衆国において、ものをつくる技能が社会参画の手段としていかに機能するのかを、家づくりを例に言及する。化学者エレン・リチャーズは『ユーセニクス』のなかで、生活に関わる正しい知識を獲得する過程で、ものをつくる行為が一定の役割を担うことを指摘、多様な知識を統合できるカリキュラムのあり方を提案した。これらの言説は、ものをつくる行為の意味と効果を、初等または中等教育のみならず高等教育のなかで捉え直す必要性を強く喚起するものである。

***九鬼周造とその母***

***横地　徳広（弘前大学）***

日本哲学史で異色の輝きを放つ『「いき」の構造』。九鬼周造が戦前のフランスで構想をあたため、遊女と町人の善美な共同存在に迫った独自の哲学書である。本発表「九鬼周造と、その母」では、周造が抱いていた母はつの心象を見定めつつ、二人をとりまく人間関係に目を向けて『「いき」の構造』を読み解いた。

　はつが心を病んで巣鴨病院へと入院するに至った経緯にとりわけ注視してみれば、政争の渦中にあった実父の九鬼隆一とその部下である岡倉天心にまつわるスキャンダルの原因除去をもくろまれ、巣鴨病院に幽閉されたというわけではない点はわりに明確である。

　しかしながら、藩閥がのしていた明治の官界で他人を追い落とし、他人に追い落とされた隆一と天心の強烈な人格に、はつはその前半生のあいだてられつづける。こうした激動のなかで最後は暮らしと心を乱され切った女性こそ、隆一の元妻にして天心熱愛の恋人、周造の母であるはつそのひとであった。

　哲学で身を立てた周造にとって、人間が創造者に遠く及ばない有限者であることは思考の出発点である。人間がそうした存在であるかぎり、苦しみに染められた過去を変えることはできない。とはいえ、その過去を肯定することは、われわれ人間にも可能である。周造による母親はつの存在肯定は、純粋な輪廻を語る彼の哲学的主張のなかで、はつと天心が二人の〈いき〉な共生を肯定しうる論理的選択肢を母親はつに贈ることを意味していた。純粋な輪廻が人間世界の存在原理であることを周造が発見したとき、不遇をかこった母はつが、その輪廻のなかで天心との共同存在を肯定する無限回の可能性が生まれたからである。

　はつと二人の父のことをふりかえった壮年の周造は、それゆえ、「すべてが詩のように美しい」と表現しえた。〈いき〉の哲学と創造的邂逅を果たした彼にとって、それは自身の生存感覚となっていたように思われる。

***読書がもたらす親密圏のジェンダー意識　－『ボヴァリー夫人』におけるエンマの「読書」を通して－***

***水町　いおり（名古屋市立大学大学院）***

比較文化学会中部支部での口頭発表において、報告者は、フランス19世紀の小説家ギュスターヴ・フロベールの著作『ボヴァリー夫人』を取り上げ、主人公エンマの読書が、彼女の親密圏におけるジェンダー意識にいかなる影響を与えたのかについて述べた。発表の目的は作品の背景研究とテクストの内在的分析の双方を融合させ、「読書」という表象を通して、『ボヴァリー夫人』の多角的なジェンダー分析を試みることである。なお、「親密圏」とはprivate sphereの訳語であり、個人の私的領域のことを指している。

『ボヴァリー夫人』の時代背景となったフランス七月王政期（1830－1848）の社会的特徴は、家父長的、保守的な規範性を有していることにある。公的に作りあげられた男性優位の社会通念は、読書を通じて個人の親密圏へと到達し、個人のジェンダー意識に影響を与えているとの推察のもと、報告者は、第１章で読書をとりまく歴史的、文化的な背景をジェンダー的な視点で考察した。その結果、七月王政の読書は、女性の自己実現を可能にする一方で、保守的な社会規範の形成する役割も持ち、相反する両義性、すなわち「自己実現」、「個人の楽しみ」といった親密圏の充足をはかる側面と「男性優位の社会規範を補完する」というアンビバレントな二面性を持っていることを明らかにした。

第２章では、読書という行為を通して、公共的規範性が個人の親密圏に流入するプロセスと、親密圏でのエンマのジェンダー意識について分析した。エンマにとっての読書は、夢想を作り出す一方で、不満足な現実からエンマの目をそらし、エンマを社会規範の中に留めておく役割を持っている。エンマの読書は、その読書内容が公共圏における男性優位の規範をエンマの親密圏に流入させ、本人の内面性に影響を与えただけでなく、本を読む行為そのものがエンマ自身を当時の規範に留めておく「柵」の役割をしているのである。

男性に従うことを強く望まれた七月王政期の社会において、エンマは規範を順守するための教育を受け、読書の内容と読書行為によって、無意識的に男性優位社会を補完している。そのようなジェンダー意識を培った一人の女が、自分が従属するに値する男性を探して不倫をし、葛藤しながら奔走するエンマの姿に、男性を利用した限定的な自己実現ではあるものの、自分の生き方を模索する積極的な精神性を見ることができる。もちろん、このような自己実現は他律的なものであり、七月王政当時の女性たちの限界を示すものでもある。しかし、ある時、「もう、なにもかも読みつくした」と言って読書をやめ、社会規範から逸脱したエンマの姿に、後のフェミニズム運動につながる「新しい女」の出現の萌芽を感じることもできる。エンマの読書はエンマを規範に留める一方で、自己実現のきっかけをも作ったのである。

***南米日系人の子どもを対象とした教材開発に関する研究***

***白鳥絢也（星槎大学）　津村公博（浜松学院大学）　澤田敬人（静岡県立大学）***

本発表は、日系ブラジル人の子どもへの教育実践を視野に、外国にかかわる子どもたちとの「共生」を目指した教材開発を目的としている。「共生」とは、「異なる国家や地域、民族、環境のもとに生活している人々が、それぞれの文化や歴史の個性を認め、異質性を尊重し、相互に良好な関係を持ちながら協力して生活すること」であり、学校現場を想定した場合、①違いを違いとして認め合うこと、②違いの中から良い点を相互に取り入れること、③どちらの立場に立っても矯正しなければならないこと等を具体的に示し、世界には多様で異なる文化があり、それが相互に尊重されなければならないことを子どもたちに理解させるのである。

このような学校「内」での対応と同時に、多文化共生の視点から、日本社会への適応や地域社会の構成員としての自覚をも考慮した取り組みが求められ、学校「外」へ視野を広げた教材開発も重要となってくる。しかし、現実的には、初歩の日本語教材や現行教科書を用いての授業実践がほとんどであり、外国にかかわる子どもとの「共生」を目指す視点に立った教材、日本人の子どもにとっても有益であるという視点からの教材は皆無であるといえる。

　これらのことを踏まえ、南米日系人の子どもと日本人の子どもとの「共生」を目指した「教材」について検討し、先行研究の吟味から、外国にかかわる子どもが母語・母文化を学ぶための教材及び日本人の子どもが外国を中心とした多文化に接する教材が「同時」に求められていることを指摘した。また、そのうえで①外国にかかわる子どもが地域文化や日本社会に適応するための教材、②学校や地域の多文化状況を問題解決的に学ぶための教材、③グローバル化へ対応するための教材、④自分のルーツを探るための教材、⑤日本の伝統を大切にした教材、⑥体験型教材（経験・探究・発信）等の必要性を提言した。

**2012（平成24）年度中部支部決算報告**　（事務局長：渡部いづみ）

平成24年度　日本比較文化学会中部支部　会計報告書

自：平成24年4月1日

至：平成25年3月31日

（単位：円）

|  |  |
| --- | --- |
| 支出の部 | 収入の部 |
| 科　目 | 金　額 | 摘　要 | 科　目 | 金　額 | 摘　要 |
| 会場使用料 | 2,440 | 4/24　クリエイト浜松 | 前年度繰越金 | 24,025 |  |
| 会場使用料 | 3,800 | 8/27　静岡労政会館 |  |  |  |
| 会場使用料 | 4,050 | 2/10　ｱｸﾄｼﾃｨ浜松 | 会費 | 6,000 | 9/22　第3回中部支部研究発表会費 |
|  |  |  | 補助金 | 10,000 | 11/12　日本比較文化学会本部より |
| 雑費 | 1,755 | 9/21　スーパーもちづき　お茶、お菓子等 |  |  |  |
|  |  |  | 受取利息 | 1 | 4/1 ゆうちょ銀行利息 |
|  |  |  | 受取利息 | 2 | 10/1ゆうちょ銀行利息 |
| 次年度繰越金 | 27,983 |  |  |  |  |
| 合　計 | 40,028 |  | 合　計 | 40,028 |  |

現金残高　　　　　　 1,250

ゆうちょ銀行残高　　26,733

27,983

以上のとおり報告致します。

平成25年5月23日

日本比較文化学会　中部支部長　岡本　武昭

　　　　　　　　　　　　監査　白鳥　絢也

　　　　　　　会計・事務局長　渡部いづみ

**2013（平成25）年度第４回中部支部大会　発表者募集のご案内**

以下の日程で、中部支部大会を開催いたします。

　　日時：2013（平成25）年10月5日（土）　13:00～17:00　　　場所：浜松学院大学

発表を希望される方は、日本比較文化学会のホームページに掲載の「研究発表申込書」に必要事項を漏れなく記入し、平成25年9月7日（土）までに、中部支部・白鳥絢也宛にEメール（ファイル添付）または郵送でお送りください。

「研究発表申込書」の送付先：j\_shiratori@seisa.ac.jp

郵送の場合の宛先：〒259-0111　神奈川県中郡大磯町国府本郷1805-2　星槎大学大学院教育学研究科

白鳥絢也研究室気付　日本比較文化学会中部支部　電話0463-71-6044

**中部支部大会　『名古屋地区』　開催者募集のご案内**

今後、『名古屋地区』におきまして、中部支部大会を開催することを予定しております。つきましては、名古屋地区での支部大会開催推進の意思がある方を募集致します。

中部支部を、より充実・発展させていくために、是非ご協力いただきたく、お願い申し上げます。

開催を希望される方は、下記までご連絡下さい。お待ちしております。

○連絡先：053-485-6948

○tk-okamo@khaki.plala.or.jp　（支部長：岡本　武昭）

**『中部支部ニュース』第3号**

**発行：日本比較文化学会中部支部**